

Title	序
Sub Title	Preface
Author	白井, 浩司(Shirai, Koji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.54, (1989. 3) ,p.i- ii
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	村松暎, 藤田祐賢両教授退任記念論文集
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001--003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

序

白井浩司

村松暎君と藤田祐賢君とがともに定年を迎えるという。時の流れの早さに、しばし愕然とする思いである。

中国文学科と云えば、塾生時代に柴田錬三郎君と、三田文学を通して識りあいになった。昭和十三年に発表した『十円紙幣』は巧みな筆の運びで、後年の物語作家の誕生を予告するものだった。当時からあまりしゃべらず、眼は優しいが口をへの字に結び、つまらなさそうな顔で幻の門の前の坂を降りてくる姿が印象に残っている。

奥野信太郎先生からは、日吉で、漢文の授業を受けた。先生の協力で完成した、佐藤春夫の訳詩集『車塵集』を教材に使ったと記憶するが、すぐに北京へ留学されたので、再度お眼にかかったのは戦後である。三田文学会の会長として、若いひとの仕事に暖かい眼なごしを注いでおられた。晩年は、テレビに出演なさることが多く、たいへん粋な方で、逸話には事欠かない。学術論文の執筆にはほとんど興味を示されなかったが、滋味掬すべき随筆の数々は、いま読んでも楽しい。中国語は純正な北京語を、中国人同様に自由に駆使された。

村松、藤田の両君は、奥野先生の、いわば秘蔵っ子であり、お話は先生からよくお聞きした。おふたりとも外柔内剛型だが、村松君は文人肌で、藤田君は学究肌だと、よく云っておられた。おふたりは、それぞれ専門の領域で、余人の追隋を許さぬ成果をあげてこられた。藤田君の『聊斎志異』の精緻な研究は、国際的に高く評価されている、と聞く。

村松君の場合、香港への外務省派遣留学の所産として出版された『中国三千年の体質』は、深遠な学殖が偲ばれる、啓

蒙的な著作だったが、流れるような筆づかいは、先生の評語の正しさを裏づけている。

さらにまた、新聞の偏向を鋭く批判する発言には、眼を瞳らせるものがある。新聞が憑かれたように賞めそやし、それに同調する者が中国文学界に少なくなかったあの文化大革命を終始、冷静に眺めておられたのは、透徹した歴史認識があつたからだろう。塾内では、女子高校長を二期四年勤められた。裏表のない、飄々たる人柄も手伝って、名校長と謳われた。

村松君もちろんそうだが、特に藤田君は、学生の面倒見がとてもよかつた。万事に淡々とした藤田君は、中国文学科のとりまとめ役として最適だった。地味な仕事だが、それがあつてこそ村松君の活躍も生まれたのだろう。

両君が定年で三田を去る、と云つても、老けこむ年齢ではない。むしろ、雑用に煩わされることなく、これからも、研究や執筆に明け暮れる毎日を過ごされることと思ふ。御自愛を切に祈りたい。